

# St. Luke's International University Repository

## 〈ミジメ〉と〈ホコリ〉のはざ間で生きる人々： 山谷でのフィールドワークから

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 裕子, 高橋, 美香子, 羽山, 由美子, Shimizu, Yuko, Takahashi, Mikako, Hayama, Yumiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.34414/00014888">https://doi.org/10.34414/00014888</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## <ミジメ>と<ホコリ>のはざ間で生きる人々 —山谷でのフィールドワークから—

清 水 裕 子<sup>1)</sup>、高 橋 美香子<sup>2)</sup>  
羽 山 由美子<sup>3)</sup>、水 野 恵理子<sup>3)</sup>

### 要 旨

バブル崩壊から始まった不況により、都市の公園や路上にはホームレス（路上生活者）が増え、他の先進諸国と同様に社会問題として認識されつつある。彼らに対する世間の目は厳しく、「働かずして食っている」「汚い、不潔」といわれる。彼らに対する否定的なイメージは簡単には払拭できず、私達看護職者は、病院などで偏見による誤ったイメージで彼らを扱ってしまう危険性がある。

本論文の目的は、東京の山谷地区に住むホームレスの日々の生活を報告することである。彼らの事実を知ることによって、少しでも彼らに対する偏見を修正できたらと願っている。私達は山友会という、17年間山谷の人々に衣食を中心に様々なサービスを提供している民間団体でフィールドワークを行い、活動に参加しながらフィールドノートを作成した。

山谷地域は江戸時代から貧民層、日雇労働者、売春婦等が住む街であった。1970年から80年にかけて、東京一の日雇労働市場として建設関係の労働者の供給源となった。しかし、現在では求人数は減少し、山谷に暮らす人々は今や殆どが高齢の単身男性である。

路上にダンボールをひき毛布をかけて寝ているホームレスは目に付く。また、多くのホームレスがブルーテントと呼ばれる青いビニールシートで覆ったテントで暮らしている。彼らはわずかな現金を得るため、空き缶等を集めて売る。お金が得られなければ、生き残るために「ごみ箱をあさる」ことになる。プライドを犠牲にして生きる道を選ぶ、<ミジメ>へ落ちる。人間としての<ホコリ>を守り<ミジメ>へ落ちる事を拒否する者もいる。それは生への戦略の放棄、すなわち死に続く道への選択である。

本質は何か、事実はどうであるか、物事を探求していこうという姿勢が偏見を軽減し、彼らの事実を知ることによって、より慎重な言動をすることができるようになるであろう。

#### キーワード

ホームレス 山谷 偏見 フィールドワーク

### I. はじめに

バブル崩壊から始まった不況により、都市にはホームレス（路上生活者）が増え、社会問題として認識されてきた。彼らに対する世間の目は厳しく、「働かずして食っている」「汚い、不潔」といわれる。果たして本当にそうなのだろうか。社会問題として認知されてマスコミなどで取り上げられるにつれ、私達は彼らに対する異なる

一面を垣間見ること、もあるが、否定的なイメージはいまだ払拭されていない。

彼らの増加に伴い、看護職者としても、一般人としても、今後彼らに接触する機会が増えるだろう。その際、意識的にでも無意識にでも偏見を持っていることが彼らに対する差別的な言動として現れてしまう可能性がある。それを防ぐ一番の方法は実際に彼らに接して人間関係を構築することである。「ホームレス」というカテゴリーとしての彼らではなく、人間として、一個人として彼らと関われば、他のホームレスに対しても違った見方ができるはずである。何より大切なのは事実を知ろうとする態度である。偏見そのものは認知過程の上で生じる無意識の産物であり、それは人間の情報処理能力の限界が生

受付日2002年1月23日 受理日2002年5月20日

1) 東海大学医学部付属病院

2) 川崎市立川崎病院

3) 聖路加看護大学

んだ合理的なシステムなのだろう。しかし、これは情報を注意深く考察すれば防げる類のものである。本質は何か、事実はどうであるか、物事を探求していこうという姿勢が、偏見を軽くしてくれるだろう。

本研究の目的は、山谷地域の歴史からふまえた特性を明らかにし、そこで生活する路上生活者の生活の一端を非営利団体の支援活動に関わりながら記述することである。そしてフィールドワークを通して彼らの現実の一端を理解することで、私達の偏見が修正されるであろうことを願っている。

## II. 方法

山谷地域の民間団体である、山友会を拠点としたフィールドワークを行い、対象者は

- 1) 山友会利用者30名前後
- 2) パトロール先で出会った路上生活者、数十名であった。

データ収集は以下の3つの方法で行なった。

1. 2001年9月6日から11月1日の期間、計21日間に渡り山友会において活動に参加しながら観察をした。

具体的には1階の相談室でお茶をだしたり、2階の憩いの部屋でおにぎりや料理を作る手伝いをしたり、毎週水曜と木曜のパトロールに参加したりしながらおじさん達から聞き取りをし、フィールドノートを作成した。

聞き取りは次の点について留意して実施した。

- (1) 日々の衣食住と睡眠、仲間との交流について
- (2) 仕事への思いと現状
- (3) 現在の自分に対する思い

### 2. 見学・聞き取り

- (1) 2001年9月23日山谷地域敬老会にボランティアとして参加
- (2) 2001年9月26日城北福祉センター見学
- (3) 2001年10月8日NPO法人ふるさとの会主催シンポジウムに参加
- (4) 2001年10月26日NPO法人さなぎの家設立記念企画寿町ツアーに参加

### 3. 資料収集

- ① 東京都都庁都民情報ルーム
- ② 城北福祉センター

データ分析の方法は、観察の記録、フィールドノートを繰り返し読み、そこに流れるテーマを読みとる。その後共同研究者間で共に再考、確認を行った。また、以上の結果を文献検討の結果と照らし合わせて分析した。

### 4. 倫理的配慮

- 1) 聞き取りにあたっては、対象者に個別に口頭で説明し、口頭で承諾を得た。

- 2) 本文中、本人と特定できるような表記は行なわない。
- 3) 対象者の個人的な情報は部外に持ち出さない。

## 5. フィールドワークの場所・山友会について

山友会は1985年に設立され、17年間にわたり山谷の労働者と共に歩んできた民間団体である。カトリック団体を母体としているが、現在は宗教色はだしていない。山谷の中心地・泪橋交差点からすぐのところであり、6人のスタッフで運営している。

1階は相談室と公認無料診療所・山友クリニックがある。相談室前の路上には毎日大勢の人が集まり、語り、お茶を飲み、時には洗濯をしたりしている。2階は「憩いの場」となっていて、主に高齢者・障害者・病弱者のための場所である。12畳程の広さのスペースと台所があり、月曜から土曜まで15人前後の利用者に対しボランティアが食事を提供している。毎週水曜日と木曜日はここでパトロールの為のおにぎりを作っており、彼らのうちの何人かは必ず手伝ってくれる。パトロールの日にはボランティアがたくさん訪れ、たいへん賑やかになる。3階は事務室となっている。

毎週水曜日は桜橋付近、木曜日は両国付近のテント生活者及びおにぎりを求めて集まってくる人々におにぎりを配っている。また、すぐ近くの簡易宿泊所(ドヤ)の一室を山友会で借り上げており、具合の悪い人を一時的に泊めている。対象は、入院の必要があるが手続きがその当日では間に合わない人や、入院する程ではないが数日間の安静と投薬管理で症状の改善が望める人などである。

補足：“おじさん”という表現

東京都は今まで「路上生活者」という用語を使用していたが、平成13年3月に発行した「東京のホームレス」(ホームレス白書)では「ホームレス」という用語が使われるようになった。ここでは「路上生活者」は屋外(公園、道路、地下街等)でダンボールをひいたり、毛布をかぶったり、テントを建てたりして寝泊りしている人を指し、状態を表す言葉である。「野宿者」も同じ意味としている。「ホームレス」とは「社会的に孤立した状態の人、家の中で通常営まれるべき日常生活を喪失している人なども含む幅広い概念」ということだ<sup>1)</sup>。この定義だと、簡易宿泊所の住民もホームレスに含まれ、山友会の2階にドヤから通っている生活保護受給者達もホームレスということになる。本稿では、そういう人々を指す言葉として山谷地域でボランティアをしている人達が一般的に使用する“おじさん”を使用した。彼らは特別な存在ではなく、フィールドワークで出会った男性であり、さらに偏見の眼差しで見られるのではなく、限りなく彼らに近づきたいという意図も込めて、以下おじさんと表記する。

### III. 結果

#### 1. 山谷の歴史

山谷という地名は昭和41年の住居表示制度の実施により消滅したが、だいたい明治通りの汨橋交差点を中心とした台東区と荒川区にまたがる約1.65平方kmの広さの地域をさす。この地域の特徴は、日雇労働市場（寄せ場）と簡易宿泊所街（ドヤ街）が存在することである。

##### 1) 第二次世界大戦以前

山谷という地名がいつからあったのか定かではないが、奥州街道と日光街道の江戸への入り口として宿場的な形態をもっており、江戸後期には街道に沿って木賃宿（宿屋側が用意した薪で自炊し大部屋に雑魚寝する宿屋）が立ち並ぶようになった。すぐ隣の吉原遊郭を除けば田園が広がる農村地帯であったが、明治に入ると田園は埋め立てられて長屋が建ち、次第に市街化が進んでいった。これらの長屋や木賃宿には、「無産化した士族や職人、かつて身分制度の下に置かれていた人々、土地を失って流入してくる農民など」が住みついた<sup>2)</sup>。明治20年に「宿屋営業取締規則」が定められ、木賃宿は特定の地域以外では営業できなくなった。山谷では浅草区浅草町が営業許可区域とされた。

職業紹介所や託児所、児童相談所、市営簡易宿泊所、授産所などが大正時代から昭和初期にかけて相次いで作られた。この頃の山谷は日雇労働に従事する者も多かったが、吉原を目当てにする遊山客や行商人、大道芸人が宿泊する街でもあった。しかし、汨橋交差点を中心に「人夫請負人」（今で言う手配師。仕事の斡旋を行う）から職を得ようと集まる労働者の数が次第に増えていった。山谷地域には20を超える業者が存在し、幾重にも存在する仲介業者の手で賃金の中間搾取が行われていた。

##### 2) 戦後復興期

昭和20年の東京大空襲により、山谷地域も焼け野原となった。都内の街頭は戦災で家や家族を失った人々や外地から引き揚げてきた人々であふれ、特に上野は多かったという。都は彼らを施設へ強制収容しようとしたが、施設はたちまちのうちに飽和状態となり、劣悪な環境のため一旦収容してもすぐに飛び出す者が後を絶たなかった。そこで都は、再建用の建築資材の払い下げを要望していた木賃宿街の旅館経営者に無料で旧軍隊のテントやベッドを貸し付けて「テント・ホテル」とした。こうして山谷の焼け野原にテント村が誕生し、上野から沢山の人々がトラックで運ばれた。山谷は再び活気づき、戦後の山谷簡易宿泊所街の出発点となった。戦後しばらくの間、ヤミ物資のかつき屋やブローカー、やくざなども横行し、簡易宿泊所の個室はいわゆるもぐり売春にもかなり利用されたといわれている。昭和33年には売春防止法が施行され、吉原を追われた女性達が山谷に流れこんだが、取り締まりが強化されるにつれ姿を消していった。昭和23年に上野公共職業安定所労働課玉姫分室（玉姫職安）が

新設され、職業紹介、日雇失業保険などの業務を開始した。昭和32年頃には都電三ノ輪駅付近にあったヤミ労働市場が、取り締まりの強化により山谷に移動してきて、「汨橋交差点を中心にした都電通り一帯は都内随一の労働市場にふくれあがった」<sup>3)</sup>。また30年代の半ばには朝鮮戦争により輸血需要が増大し、山谷地域はその最大の供給源となった。売血制度が廃止されたのは昭和44年である。

昭和31年の経済白書は「もはや戦後ではない」と宣言した。経済成長に伴う企業の管理部門の都市集中により、30年代は空前のビル・ラッシュとなった。「旺盛な経済活動は土木・建築作業や港湾荷役作業に必要な労働需要を高め、都内の寄せ場は活気づいた」<sup>4)</sup>。やがて山谷は簡易宿泊所としても寄せ場としても都内最大となった。

昭和35年、完成したばかりの「マンモス交番」（浅草警察署山谷警部補派出所）に対する襲撃事件が発生し、約1,000人の群集により投石、放火、破壊等が行われ、ニュースとなった。34年秋頃から簡易旅館が一斉に宿泊代を値上げしたことへの不満と、山谷の中心部に威圧するように出現した交番への不満・不安などが底流にあった。この暴動が契機となって行政が腰を上げ、都による山谷対策が開始されることになった。昭和41年までは1年おきに、42年以降はほぼ毎年のように「暴動」が発生した<sup>5)</sup>。

##### 3) 高度成長期から現在

昭和39年に東京オリンピックが開催され、選手用宿泊施設、高速道路、新幹線などがオリンピックのためと銘打って作られた。昭和30年代後半から40年代半ばまでは「山谷に行けば仕事がある時期だった」という<sup>6)</sup>。東北地方の農民の出稼ぎや集団就職、閉鎖された炭鉱から流れてきた坑夫などを吸収して労働市場はどんどん大きくなった。この頃の山谷には所帯持ちも多く、児童や母子に関する支援策が打ち出された。昭和35年に玉姫生活相談所が、37年に山谷福祉センター（40年に城北福祉センターに発展）が開設し、健康相談、授産、託児、児童学習、レクリエーションなどの事業が行われた。「この結果として山谷地域の宿泊者は、より一層単身男性に単一化されていった面がある」<sup>7)</sup>。昭和59年には託児・児童厚生事業は終了となっている。

昭和40年代半ばから経済成長は鈍化し始め、46年のニクソン・ショック、48年の第一次オイルショックを契機として低成長の時代に入り、失業対策が実施された。昭和60年頃にバブル期を迎え、土木・建設作業が急増した。「朝、仕事に行こうという意思をもってドヤを出て、仕事にありつけないで帰ってくるというようなことは、まず考えられないことだった」という<sup>8)</sup>。昭和50年頃から始まったドヤの建て替えはバブルの好景気によって一気に進み、鉄筋コンクリートで個室のドヤが主流となっていった。

バブル崩壊によって山谷は就職難へと陥った。「手配

師の数が目に見えて減少していき」労働センターで職を求めることは熾烈な争いとなったという<sup>9)</sup>。多少の蓄えがあった者も、ここまで長い不況では耐えられずドヤをでていかざるを得なくなる。また、この不況は日雇い未経験者の路上生活者も大勢生み出し、ホームレス問題として社会に認知されつつある。東京都内の路上生活者の数は、平成12年8月の時点で5,700人と都は推定している<sup>10)</sup>。

## 2. 山谷でのおじさん達の生活

バブルの頃は、労働力は足りないくらいで、仕事は選ぶほどたくさんあった。日給も良かった。月の半分ほど働いてアブレ金(2ヶ月に26日以上働くと残りの日に対してでる失業手当のこと)をもらえば、大卒の初任給を少し上回る程度の収入を得られたという。しかし、私達が初めて山谷を訪れた平成13年の時点では、このような労働者はほとんどいなくなっていた。それよりも墨田川テラスや公園に沢山並ぶブルーテント(路上生活者達が住んでいる小さな小屋。青いシートで被われているものが多いのでこう呼ぶ。)の方が目に付いた。これはバブル崩壊後、都内に急速に増えたのだという。

### 1) 仕事

路上生活者となっても、食費などに費用はかかるし、いつかはここを出て行きたいと考えるため、仕事を求める。しかし、日雇労働者が得意とする建設関連の仕事は、深まる不況と機械化により、求人が増える気配はない。仕事があっても顔付け(手配師が顔見知り仕事を持ちかける事)や彼ら同士のクチコミで得る事がほとんどである。そこで、屑物拾い、雑誌集め、ダンボール集めや空き缶拾いをして生活の糧を得る。しかし、空き缶は最近では1kg70円くらい、1日集めても10kgになるかどうか、という。昼間は寝て夜に屑物拾いなどをする者もいる。テントを建てず、ダンボールをひいた上に寝ている者にとっては、夜は動いて体を温め、昼に寝ることで睡眠への欲求を満たしているのである。

### 2) 路上生活

路上で寝ている姿は目に付く。しかし、彼らとて好きで路上生活をしているわけではない。7割は、自力でアパートや公営住宅で生活したいと思っている<sup>11)</sup>。路上生活は一般の人が想像する以上に厳しい生活である。最低限必要な物は、寒さから身を守る毛布である。安眠は誰にとっても重要だ。安定した住居を持たない彼らは、なんとかこれを得ようと努力する。彼らは毛布を背負って歩いたりコインロッカーに入れたりなどして守る。安眠を妨害するのは寒さだけではない、若者やサラリーマンによる心無い襲撃もありうる。かつては山谷の路上において寝ている間に荷物を盗まれる「モガキ」と呼ばれる行為が日常茶飯にあったが、今ではそれも少なくなり、かわって少年による襲撃を恐れる人が多い。何となく同じ位置で寝るのは安全に配慮してのことであろう。そう

して、彼らは名前は知らないが顔は知っている仲、というネットワークを形成する。

テント生活になると、「かりこみ」に対処しなくてはならない。かりこみとは、月に1回位行われる「清掃」のことである。その日はあらかじめ警告されるので、朝テントをばらすなどして移動し、「清掃」が終わるとテントを元通り組み立てる。テントを移動しなければ撤去されてしまうからだ。これがなかなか大変で、手伝いをしあっている者も多い。

### 3) 食事と酒

そうしたネットワークにおいて、酒はコミュニケーションの道具となり、過去や自分を忘れる薬となり、生活の様々な交渉にも使用される。金の無い時におごられたら、金のある時におごり返さなければならない。山谷ではそうしたつきあいによりアルコール依存へとなっていく者がかつては多かった。しかし、バブル後では、酒びたりになる程酒を飲むこともできなくなった。酒の飲めない者は飲めない者同士つながり、コーヒー等で代用する。

そういったネットワークからボランティアの炊き出しの日時などの情報が得られる。しかし、彼らにとっても物を貰ったり、ましてや拾ったりして食べるのは、抵抗のあることである。「物を拾って食べるようになったら終わり」というおじさんもいる。ホテルのお弁当が捨てられる所などをおさえており、きれいな物はそのまま朝市(山谷の路上で毎朝開かれる。多くが盗品といわれる市。)で売っていたというおじさんもいたが、その一方、パトロールで配るおにぎりを「いらない」と言う人や、受け取っても全く手をつけずに死亡してしまった人もいる。

### 4) 福祉との関わり

福祉に対する拒否感はいずれもある。福祉にお世話になりたくないという人がいる一方、拒否感を持ちつつも生活保護がもらえる年齢まで生き延びようとする人も多い。生活保護は基本的に住所がないと受けられないが、山谷においてはドヤを住所とすることができる。しかし、保護を受けるには高齢であるか、病気であるかのどちらかの条件がなければならない。それゆえか、自分は病気持ちであるということ自ら話すおじさんは多い。病気であることが福祉(生活保護)をもらう自分を正当化させる理由となるからかもしれない。実際、山友会2階に集まるおじさん達は糖尿病、肝疾患、肺疾患、心疾患、痴呆等、様々な慢性疾患を抱えている。「誰も健康じゃないんだよ。みんな病気持ちだ」と、あるおじさんは言う。しかし、生活保護を受給すれば、路上よりはずっとよい住居と現金を手に入れることができる。

## IV. フィールドワークを通して考えたこと

### 1. <ミジメ>と<ホコリ>のはざ間

山谷の歴史、及び、仕事・食事と酒・福祉とのかかわりについて「おじさん」たちの生活の一端を記述した。

彼らの生活と思ひから伝わる特徴を表す主要概念として、〈ミジメ〉と、それと表裏一体をなすであろう〈ホコリ〉に思い至った。〈ミジメ〉とは、仕事を失っていく中で生活が崩壊し、路上生活に辿り着いた高齢を迎えつつある男たちの、やり直しのきかない、また積極的に生きることを諦めた状況を指している。〈ホコリ〉とは、他方で、そうした路上生活にあっても自らのプライドのために、施しを拒否する、ギリギリの限界状況での己を維持しようとする心性を指している。

私達の知るホームレスの姿は、昼間にも関わらず街や公園をフラフラし、公共の図書館で時間をつぶす。夜には繁華街の路地裏やコンビニの裏でゴミ箱をあさり、自動販売機の横で缶に残ったコーヒーを集める。駅では捨てられた雑誌を拾い集めて売り、仲間と酒盛りをする。私達はそんな彼らを見ては、働かずして生きる暇な輩だと軽蔑の目を向け、働けるのに働かない、選り好みをするから仕事がない怠惰で傲慢な人間だと罵る。そして賞味期限切れの弁当や残飯を栄養源とする身体は異常に丈夫なのだと思ふ。

彼らの生活は働かずして成り立つものであるのか。彼らは自由人としての生き方を選択したのか。ホームレス生活とて全くの無一文で維持できるというものではない。彼らも生きる為に、日常の生活用品等を必要とし、それらを得る為には僅かながら収入を必要とする。彼らの収入源は都市雑業と呼ばれる空き缶拾いや廃品回収等である。それらは非常に不安定で、微少なものである。空き缶を求めて歩き回り、見つけたら踏み潰し袋詰めにする。一日働いて700円になるかならないかの収入を得ようとする彼らの労働は怠惰だと言えるであろうか。さらにこのような仕事でも収入が得られない時、彼らは生きる為に「ゴミ箱をあさる」ことになる。仕事にありつかなかった時の最終的な手段として行われるこの行動は、生きる為にせざるを得ない。人間としての自分をおとしめていかざるを得ない、それでも生きたいという生への執着、積極的な生への戦略である。かつては、「労働」という価値の中で逞しさを誇っていた大の男の〈ミジメ〉への転落の姿。それは「即時的・状況服従的・諦念的」であり、想像を絶する苦痛であろう<sup>12)</sup>。人間としての〈ホコリ〉を守り続ける人もいる。それは「対自的・状況克服的・積極的」である<sup>13)</sup>。〈ミジメ〉の拒否は生への戦略の放棄、すなわち死に続く道への選択である。彼らは施しを受けない、炊き出しに参加しない。働かずして食べる事を墮落だと捉える彼らは、〈ミジメ〉へ落ちる事を拒否する。誇り高き人生の終末は、たとえそれが公園や路上であっても、決して「野垂れ死に」ではなく、誇りある死なのである。

私達は自身の価値を全てであるかのように思い込み、そのフィルターを通して見た「怠惰なおじさん」という像は全くの誤解であった。「『常人』にとって、『異人』野宿者は聖なる勤勉と労働の価値からの逸脱者」<sup>14)</sup>で

あり、彼らに対する憤りは、〈勤勉〉という聖なる価値の侵犯者に対する怒りであった。おじさんを取り囲む現実は苦しく、その人生は人間にとって耐え難い。

時におじさん達は「敗者」「落伍者」「落ちこぼれ」とみなされる。我が国において市民は戸籍や住民登録等、地域社会への帰属に付随した権利義務を獲得し生活している<sup>15)</sup>。旅行鞆1つ程の全財産を担いで路上で生きる彼らの「生きていく場所」は、この社会システムの中に存在しない<sup>16)</sup>。それは社会からの脱落・逸脱を、彼らにとっては「生きていく場所」の喪失、を意味する。世間の価値体系に存在できない彼らは、「普通」という状態すら維持できない「脱落者」との烙印を押され、その権利を剥奪される。

「落ちこぼれ」た原因は彼ら自身にあったのか。社会に適応できず「落ちこぼれ」ていくのは彼ら一人一人が怠惰で忍耐力がなく、くだらない人間であったからか。多くの人はホームレスを脱落者とみなし、脱落の原因をおじさん一人の内面的要因に求める。しかし世界を支えた日本経済を過信し、多くの日雇労働者を路上へと追いやったのは、紛れもなく日本社会の構造そのものである。その構造を作り上げ支えているのは私達自身ではないか。それにも関わらず彼らにいわれのない「落ちこぼれ」人間のレッテルを貼りホームレスであることがあたかも彼らの自己責任の範囲であるかのごとく彼らを扱い、人間性を否定し、彼らの人生を無視する。また彼らは注目にすら値しない類の人々だとさえ感じていたのではないか。

## 2. ホームレスに対する偏見とその修正

私達はおじさんについての何を、どこまで知っていたのか。世間一般が彼らに持つ悪いイメージ・偏見は私達は何を見せっていたのだろうか。

私達は社会の変化と共に変容する彼らの真実を知らない。おじさんの人生はまさに日本の経済を映し出す鏡であった。高給をとっていても身体を壊せば、即、失業につながるという不安定な環境の中、彼らは肉体を酷使して働いていた。その頃は労働者としての権利を荒々しく主張する者もいたし、手に入れた現金で疲れを癒す酒を買い求めて飲むこともできた。政治色を帯びた過激で暴力的な主張や、酔って路上で倒れている者は目立ち、世間に日雇労働者に対する、否定的なイメージを植え付けた。しかし、現在労働組合の活動は沈静化しているし、悪酔いする程に酒を買える人も少ない。現在の山谷は、「暴動に象徴される『危険』で『怖い』『土方』の空間から、野宿に象徴される『惨め』で『憐れ』な『浮浪者』の空間」に変わった<sup>17)</sup>。

偏見は、ホームレスに誤ったイメージを与えそれが彼らの真実だと思込ませる。彼らの一切の人的側面を無視し、それ以上の情報の必要性を感じさせない、精神的・社会的排除の機能を有しているといえよう。「偏見」という、事象の選択的な簡略化・符号化は、一人の人間

の寒空の下での孤独な路上死の現実すら、自業自得で片付けてしまう。

では私達とは何か。ホームレスではない私達は、彼らよりも優れた人間であったのか。彼らとは違い、不安定な社会の中、自らの力でその力を獲得し生き残ることができた勝者であるのか。おじさん達は私達の父や兄弟であったかもしれない。複雑な世界は「勝者」「敗者」のように二極に分断され得るものではない。しかし、私達がある事象を知覚する際に発生する偏見は、異なるカテゴリー、異なる集団と自身の社会的アイデンティティの帰依する集団との間を、これほどまでに強く分断してしまうのだ。

## V. おわりに

かつておじさん達は私達にとって符号化されたホームレスでしかなかった。彼らは駅や公園を不法占拠し、その存在は子供達の遊び場や夜道に危険な雰囲気を持ち込んでいた。筆者の一人の父は牧師であり、自宅である教会に彼らを笑顔で招き入れなければならなかった。異臭を放つ彼らに小銭を持たせ銭湯に連れて行き、バザーで残った衣類を与え、礼拝堂のソファに簡易ベッドを用意した。しかし母は、得体の知れない男から我が子を守ろうと決して彼らの目に子供達を触れさせようとはしなかった。長じて彼女は駅で酔って寝る彼らの悪臭に顔をしかめ、目を合わせることもさえしなかった。

フィールドワークで得たのは彼らが人間であるという事実である。目を合わせてみる、微笑んでみる、話し掛けてみることによって得た事実はおじさんの人間的な暖かさや寂しさであった。彼らは誰よりも悲しく、淋しい孤独な人間であった。これほどまでに排除されてきた弱い人間に対し何故平然と冷たい視線を投げ掛けることができたのか。

溢れる情報の中でよりよい生を求める人間は、自分が生きやすいようにそれらの情報を選択的に符号化、簡略化しつつ日常を送っている。目を背けたいもの、自分とは異質なものを否定的に捉え、それが全てであるかのごとく思い込んでしまうのが偏見である。それは人々のニーズから目を背けさせ、それがあたかも当然であるかのごとく都合のよい納得のいく理由を与えてくれる。怠け者だから仕事がない、好きで酒におぼれて失禁しても仕方がない、自分でやったことなのだから、大の大人が。世間が彼らに与えるそういったイメージは、彼らを社会のシステムから排除するだけでなく人間としての権利を奪い、その人生と存在を否定し続けてきた。それはおじさんに限ったことではない。精神障害者や身体障害者など、どれほど多くの人間が自身の社会的カテゴリーによって生きにくさを感じているのか。

偏見の向こう側に見える人々の問題は、私達自身の問題であること、そして自身の問題にも関わらず、偏見がそれを見つめることを阻んでいることを私達は知る必要

があり、知ることによって彼らの未知の部分に対して、より慎重な言動をすることができるであろう。

## 謝 辞

本論文の執筆にあたりご協力頂いた山友会スタッフの皆様、おじさん達に心から御礼申し上げます。

註：本論文は、2001年度看護研究Ⅱで聖路加看護大学に提出した、清水および高橋の論文に加筆修正したものである。

## 引用文献

- 1) 東京都：東京のホームレス, 3, 2001.
- 2) 城北福祉センター：城北福祉センター30年の歩み, 7, 1996.
- 3) 今川勲：現代棄民考, 田畑書店, 188, 1987.
- 4) 前掲書 2), 24.
- 5) 前掲書 2)
- 6) 山谷対策検討委員会：山谷対策の今後のあり方について, 3, 2000.
- 7) 同上書, 9.
- 8) 大山史郎：山谷崖っぶち日記, TBSブリタニカ, 33, 2000.
- 9) 同上書, 35.
- 10) 前掲書 1)
- 11) 新宿連絡会：路上からの提言, 32, 1999.
- 12) 青木秀男：寄せ場, 青木秀男, 場所をあける!, 36, 松籟社, 1999.
- 13) 同上書, 36.
- 14) 青木秀男：寄せ場労働者の生と死, 113, 明石書店, 1989.
- 15) 岩田正美：ホームレス／現代社会／福祉国家「生きていく場所」をめぐって, 15, 明石書店, 2000.
- 16) 同上書, 13.
- 17) 前掲書 12), 30.

# Misery and Pride

## —A Fieldwork of Homeless Men in Sanya—

Yuko Shimizu  
(Tokai University Hospital)  
Mikako Takahashi  
(Kawasaki Municipal Hospital)  
Yumiko Hayama  
Eriko Mizuno  
(St. Luke's College of Nursing)

Since the business recession became severe ten years ago, the number of homeless people has increased and it has become a social problem in Japan like many other developed countries. People often see them as lazy, dirty, and a nuisance. Prejudice against them once fixed can not be corrected easily, and the prejudice and stereo-type may result nurses to treat them with misunderstanding and based manner.

This paper describes daily lives of homeless people living in Sanya area in Tokyo. The aim of the paper is to increase understanding of the life of homeless people in order to rectify our biases. We selected Sanyu-kai, a non-profit organization, as a study field and participated their activities. Sanyu-kai has been providing various supports, such as health care, day-center, and meal services to those living in Sanya for 17 years. For two months, two to three days each week, we participated in several activities in Sanyu-kai, and took field notes.

Sanya has a long history of small community of day laborers, prostitutes and vagabonds since Edo era. In 1970s and 80s, it used to supply a largest number of day laborers for construction in Tokyo. But, now jobs are scarce and the majority of people living in Sanya now are single elderly men.

The homeless men sleep in cardboard boxes on streets with old blankets. Some of them have a tent house of blue vinyl sheets. They get some small amount of money by selling cans and bottles collected from bins. If they have no money, they gather unused lunch boxes from bins in order to survive a day. They have to sacrifice their pride for survival and live a life of misery. Some people refuse to scavenge for left over food in garbage because of their pride as a human. For those, it means giving up their life and choosing death on the street as their destination.

Knowing the truth and efforts for better understanding will help to reduce prejudice and open mind to know an individual as a person rather than see them in stereo-type.

### Key Words

Homeless people, Sanya, prejudice, fieldwork